

第3回新静岡県立中央図書館基本構想改定に係る有識者会議 会議録（詳細版）

第2回会議の開催結果報告（「蔵書の分散保管」についての再協議）

●川村委員（静岡図書館友の会代表）

- ・平成29年の建物ひび割れ被害により、10万冊を別の場所で保管せざるを得なくなったため、開架冊数は10万冊程度に減っており、それ以降の実績で利用冊数を算出するのは参考値として不適切である。（東静岡駅前に移転し）今より便利なところにあり借りやすくなった時に、その数字が適切な根拠になるのか疑問。
- ・例示された埼玉県（埼玉県立：外部＝44万：55万）と佐賀県（佐賀県立：外部＝101万：25万）の事例は、本体と外部書庫の蔵書割合が全く異なっており、今回の静岡の分散保管における「作業員2名で足りる」といったシミュレーションの根拠資料としては不十分である。

●岡本委員（アカデミック・リソース・ガイド(株)代表取締役）

- ・現在の静岡県立中央図書館の利用状況は全国的にも最低クラスであり、その中での蔵書の動きを捉えて将来推計を行うのは極めて危険である。
- ・東京都立、石川県立、岡山県立、鳥取県立、高知県立、沖縄県立など、開架30万冊を超える、県内外から高く評価されている図書館の事例も踏まえ、蔵書規模を議論すべきである。
- ・官民合同で巨大都市開発の中核施設として整備された沖縄県立図書館の事例（商業テナントの撤退）は、今回の整備計画や東静岡の立地とも類似しており、非常に参考になる。
- ・外部書庫の定義を整理し、出し入れを行う書庫なのか、「完全な収蔵庫（保存庫）」とするのか議論が必要である。
- ・静岡県立中央図書館所蔵の古い資料は、すでに国立国会図書館がデジタル化しているものも多く、これらの資料は現物閲覧の必要性は低いため、これらを地価の安い外部書庫に分散保管することは合理的である。
- ・外部書庫には、国会図書館が未デジタル化の資料を県内で電子化する「デジタル化センター機能」を持たせ、その機能を市町立図書館にも提供することが好ましい。また運用には民間を活用することも考えられる。
- ・今後100年のスパンで見れば、著作権が切れ、デジタル化できる資料が増えていく一方で新規刊行図書は減っていくため、物理的に収蔵すべき本は緩やかに減少し、書庫に収蔵する資料が増えていくことが予想される。そのため外部書庫の役割（デジタル化による資料の価値創造）がより重要になる。
- ・くずし字をAI・OCRで現代語に翻訳する先端技術などを取り入れ、大学等と協働することで、書庫整備に事業性や経済性を持たせることができる。

●野末委員（青山学院大学教授）

- ・駅前の一等地であり地価が高いという制約から、一定の分散保管が必要になる点は理解できるが、古い資料であっても緊急性・重要性の高い資料の現物確認の需要はあるため、単純な利用頻度だけでなく、情報の緊急性や性質に合わせた丁寧なシミュレーションを行うべきである。
- ・外部書庫への分散保管を選択するにあたり、コスト的なメリットがあることは理解できるが、消極的な理由だけでなく、「駅前の貴重なスペースを、動きの少ない本を置く場所ではなく、人が活動するスペースに充てることでこれだけのメリットが生まれる」という積極的な理由付け（コストと活動価値の比較）を提示すべきである。

●朝比奈会長（総括）

- ・基本的に蔵書は一体管理できることが望ましいが、駅前の土地価値を考慮すると分散保管も想定しうることである。
- ・その際、単なる財政面やコストの分析だけでなく、デジタル化の進展に伴うプラスの価値創造や、本を減らして「人間が活動できるスペースを増やす」という能動的なメリットをどう生み出すかという視点も踏まえて、事務局は今後の検討を進めてほしい。

論点1：新たな交流と価値の創造

●乗松氏（静岡市都市局都市計画部都市計画課 企画係長兼まちづくり協働担当）

- ・静岡市ではアリーナ整備やバンダイ新工場稼働、グランシップの存在を踏まえ、民間と一体となったまちづくりを推進するために「東静岡地区まちづくり基本構想」を策定した。
- ・東静岡地区では、文化・スポーツによる「非日常の感動体験」と、周辺住民の安全安心な「日常の暮らし」が共存するまちを目指している。
- ・まちづくりの5つの方針として、①文化・スポーツの拠点づくり、②若い人が留まり夢を持てるまち、③東西交通は充実しているが課題である「南北交通」の改善、④民間参入を促す規制緩和（ホテルや商業施設の誘致）、⑤豊かな緑の保全と環境配慮、を掲げている。
- ・具体的なプロジェクトとして、新アリーナ整備、新県立図書館との連携、東静岡駅と長沼駅を繋ぐペデストリアンデッキの整備、AI を活用した移動支援の社会実験などを進めている。
- ・今年度は基本計画の策定について、「東静岡地区まちづくり協議会」の中で議論しながら進めている。
- ・新県立図書館においては、「図書館ならではの」特色を進めていただき、そのうえで施設単体ではなく地域全体で捉えてまちづくりを進めていけたらと思う。

●落合氏（静岡県文化財団 専務理事）

- ・グランシップの入館者数はコロナ禍の 20 万人台から昨年度は 70 万人超まで回復しており、周辺施設（アリーナ、県立図書館など）が完成して面的な都市計画が整えば、エリア全体で年間 250 万～300 万人の非常に大きな賑わいを生み出せると期待している。
- ・公共文化ホールと図書館は「音楽と読書」「演劇と本」といった親和性が極めて高く、現時点でも夏休みの子ども向けイベント等で連携しているが、新県立図書館の開館によってさらに共同事業を強化できる。
- ・文化財団が静岡県公立文化施設協議会の会長館として県内公立ホールの連携や人材育成を主導しているのと同様に、新県立図書館が市町立図書館を強力に束ねるネットワークを築くことで、県内全域のホールと図書館が連携した効果的な事業を波及させることができる。
- ・グランシップ芝生広場は各施設の結節点であり、年間約 30 回のイベント開催をしており、利用率は 30%（土日はほぼ利用）となっているため、新図書館誕生後はさらに賑わいの中心として機能する。
- ・グランシップの駐車場は、300 台を超える日が 300 日あり、公共交通機関を使うよう呼びかけているが自家用車を使用する方が多いので、工夫が必要。

●高田氏（三菱地所プロパティマネジメント商業運営二部 MARK IS 静岡館長）

- ・MARK IS 静岡はファミリー層を中心に幅広い世代が交流する場となっており、新図書館には単なる本の貸出場所にとどまらず、人と地域を繋ぐ東静岡全体の交流拠点になってほしい。
- ・アリーナ、グランシップ、商業施設が独立するのではなく、相互に連携して人の回遊と交流を生み出すことがエリア全体の魅力向上につながる。
- ・子育て世代や学生が多く訪れるエリアであるため、子どもたちの学びや図書への習慣形成の場、若者が挑戦できる居心地の良い居場所を提供し、企業や大学との連携による人材育成の場となることを期待する。
- ・利便性向上のため、日常生活の延長線上で図書サービスに触れ合えるよう、周辺施設への「返却ポスト設置」やデジタルサービスの充実を提案する。
- ・南海トラフ地震等の災害に備え、平時は交流の場、災害時には信頼できる情報発信や地域を支える防災拠点としての機能を持たせることが重要である。

●本多氏（静岡市総合政策局社会共有資産利活用推進課 東静岡アリーナ共創係長）

- ・静岡市アリーナ整備・運営事業は落札者が決定し契約を締結した。民間事業者の提案により、周辺地域に年間 112 万人の来訪者を想定している。
- ・アリーナは敷地に対して 45 度傾けて配置し、四隅に生まれた広場スペースを活用して、イベント前後のお客さまがアリーナ外でも心地よく滞在できる空間を計画している。
- ・外観は静岡の象徴（富士山の笠雲をイメージ）を取り入れ、内部は非日常のワクワク感を演出する空間構成となっている。

- ・県内外からの来訪が想定されるなか、新県立図書館やグランシップ、MARK IS 静岡、新アリーナがそれぞれ単体の「点」で活動するのではなく、来訪者がエリア全体を歩いて回遊できる「面」としてのまちづくりを連携して進めていきたい。

●野末委員（青山学院大学教授）

- ・産官学の連携が非常に良い方向に進む予感がしている。交流や賑わいは「単に人が集まればいい」のではなく、地域や住民の課題解決（既存の強みを伸ばす、産業や教育などの新しい価値を創出する）を目的とすべきである。静岡市のまちづくり計画も課題を取りまとめたものと捉えられる。
- ・図書館でなくてもできること（美味しいレストランや自習室の設置など）に頼るのではなく、図書館の資料、情報、専門人材を活用した「図書館だからこそできるにぎわい」を最優先すべきである。
- ・単に居心地の良い場所を提供するだけでなく、県民の学びが図書館の情報充実に還元されるような「情報の生態系サイクル（学び合い）」を構築することを県立図書館は重点とすべきである。
- ・利用者の来館を待つだけでなく、図書館の機能の一部を周辺施設（アリーナやグランシップ等）に持ち出す「出張型・協働型の図書館サービス」をまちづくりに活かす形で積極的に行うべき。ただし、県内全域に波及されるものが優先される。
- ・遠方の県民や来館できない人のために、先進的なテクノロジーを導入し、各地の拠点からあたかも会場にいるような臨場感でオンライン接続できる設備を整え、擬似的な体験格差を埋める工夫をしてほしい。

●伊委員（静岡大学情報学部助教）

- ・前回の議論通り、何のための交流・賑わいなのかという軸（知の交流）をぶらさずに前提に置いてほしい。
- ・本を借りる予定がなかった人でも、通りがかりに目に入ったことで興味を持つことがあるため、多様な資料に偶然出会えるような「魅力的な展示機能」を充実させて知の交流を促すべきである。
- ・図書館が持つ知識・ノウハウだけでなく、外部の専門家を招いた講座（有料の講座を含む）の開催や、周辺施設のイベントテーマと連動した企画・展示など、地域連携型の学びの場を作ると良い。
- ・他施設へ出張展示や貸出、市町立図書館を巻き込んだ「巡回型・出張型の図書館サービス」ができると良い。

●林委員（静岡文化芸術大学教授）

- ・交流において図書館が果たすべき第一の役割は「図書・情報の提供」である。東静岡駅前に設置する最も便利な図書館の資料数を極端に制限してしまえば、周辺施設との連携において十分な役割を果たせなくなる。

- 例えば石川県立図書館のように、周辺施設のイベント（スポーツや音楽、演劇等）に合わせて親和性の高い関連書籍を展示する際、利用者が「もっと知りたい」と刺激を受けても、本が手元になく取り寄せが必要であればせっかくの知的好奇心や来館の意義が削がれてしまう。こういった知的好奇心は、すぐに満たせないと消えてしまうのもったいない。
- アリーナのスポーツ、グランシップの音楽・演劇など幅広いテーマに対応するためには、やはり東静岡駅前に相当数の蔵書を維持する必要がある。
- 保存用の本を外部書庫へ分散することは賛成だが、東静岡駅前には本を置くことを第一優先にし、集う場所は周辺のグランシップやアリーナ等の外部空間を利用するという割り切った考え方をすれば、東静岡駅前の図書館の役割が明確になる。

●小久江委員（袋井市生涯学習課長・元市立袋井図書館長）

- 提示された県外の事例は蔵書がいっぱいになったための単なる「倉庫」としての分散であり、今回議論になっている分散のあり方とは性質が異なると感じる。
- 東静岡という利便性の高い立地に図書館ができることで県内外から多くの人が集まるため、静岡市のみならず、伊豆や西部地区など全県的な産業・観光・物産の魅力（例えば盛んなお茶産業など）を紹介し、資料と産業と一緒に発信できるスペースを設けるとよい。

●川村委員（静岡図書館友の会代表）

- 現基本構想は一体整備で進んでいたものが、財政的な理由から書庫の分散化へと舵を切られた経緯は非常に不本意である。
- 東静岡の一等地にそれだけの資料を置くことのコストについて、県民への説明責任は理解できるが、現基本構想が掲げていた利点（豊かな蔵書環境）をどう担保するのか、安易に「市立図書館を少し大きくしたようなもの」に妥協せず、県立としての誇りある規模を議論してほしい。
- 鈴木知事が選挙前に「基本構想を遵守する」「直営方式を維持する」とアンケートで回答されている。
- 県民が「あそこに行けば江戸時代の貴重な資料まで何でも揃っている」と誇りに思えるような、人口流出を食い止めるだけのプライドを持てる知的拠点にしてほしい。

●岡本委員（アカデミック・リソース・ガイド(株)代表取締役）

- 近年新設された他県の県立図書館は総じて 30 万冊規模の開架を実現している。
- 単に「おしゃれなカフェがあるから人が来る」という賑わいは持続せず、より魅力的な商業施設ができれば淘汰されるため、あくまで「図書館らしさ」にこだわった賑わいを目指すべきである。
- 2022 年に開催された「ブックフェスタしずおか」は全県を巻き込んだ素晴らしいイベントであった。新県立図書館では、このような本に関する大規模なフェス（東京神保町の

ブックフェスティバルに匹敵するもの)を開催できるにぎわいや交流の仕組みを作るべきである。

- ・静岡は東京と大阪の中間に位置し、企業の研修地や集合場所として選ばれやすいという「地の利（交通の要衝）」があるため、この優位性を生かしたブックフェス等の交流を構想すべきである。
- ・紙の本だけでなくデジタル資料も含めて、人々がより広い概念で「本」や「情報」に触れられる場にすべきである。
- ・石川県立図書館は成功しているが、公共がサービスを過剰に提供しすぎると周辺の民間投資やビジネス（民業）を圧迫する懸念がある。無料で使える居場所の提供など基本機能は維持しつつ、有料スペースや民間商業とのバランス（グラデーション）を考慮し、官民の適切な役割分担を意識すべきである。
- ・これほどの規模の副都心開発において、文化施設（図書館やグランシップ、アリーナなど）が明確に位置づけられているまちづくりは、日本のこれまでの都市開発において他に例がなく、非常に素晴らしい政策であり、強く期待している。

●岩田委員（(株)谷島屋・静岡営業部部長）

- ・MARK IS 静岡の開業時の谷島屋書店の店長を務めていた経験から、あのエリアは3世代（祖父母、親、子）のファミリー層が非常に多く、絵本や児童書の売り場を大きくし、居心地の良い滞在空間を設けたことで成功した。
- ・若者やファミリー層が魅力を感じ、人口流出を防ぐようなまちづくりにおいて、図書館ができる最大の貢献は「本のまち」としての魅力を東静岡に創出することである。
- ・新図書館の周辺に、静岡にはこれまでなかったような個性的な本屋や個人商店が集まり、エリア全体が「本のまち」として機能すれば、知の意欲がある人が集まる非常に強力な交流拠点となる。
- ・谷島屋で実施したアンケートでも蔵書への期待の声は極めて多く、本のまちの核として図書館の蔵書確保は不可欠である。
- ・交流や学習スペース機能についてはすべてを県立図書館が抱え込む必要はなく、高校生や大学生向けの無料学習スペースは公が用意し、社会人向けのビジネススペース等は隣接する民間の有料施設（コワーキング等）に任せるなど、利用者のターゲットに応じた民間連携を進めるべきである。
- ・線路（JR 線）が南北を分断しているため回遊性が低い点が東静岡の長年の課題であり、静岡市とも協力して、南北をスムーズに行き来できる動線を確保することがエリア回遊性を高めるには極めて重要である。
- ・イベントが重複した際の「駐車場の不足」は深刻な課題となるため、公共交通機関の利用促進と合わせたエリア全体の駐車・交通対策が必要である。

●朝比奈会長（総括）

- ・周辺施設との連携を考えると、周辺施設で実施していることと親和性の高い資料を特に新図書館において展示するなど、機動的な対応が求められる。
- ・人が集まれば何でも良いという安易な賑わいではなく、「情報の拠点」「知の集積地」という図書館の軸をぶらさずに、どう周辺（演劇、音楽、スポーツ、模型など）と連携していくかが極めて重要である。
- ・ファミリー層や3世代が訪れる立地特性を踏まえ、ハード（建物）の議論に終始せず、掛川市の二の丸美術館の優れた学芸員による企画展（グミの世界展という大人気企画）のように、周辺施設や民間とクリエイティブに連携・企画できる優秀な人材をどう配置するか、ソフト面での工夫も成功の鍵となる。

論点2：基本構想改定素案

●岩田委員（(株)谷島屋・静岡営業部部長）

- ・これまでの議論の内容（特に県立中央図書館として「児童書の全点収集」を継続することなど）が素案にしっかりと反映されており、全体として良い改定案になっている。
- ・児童書全点収集といった県立ならではの重要な基本機能やその意義について、アンケートの結果などからも一般県民にはまだ十分に知られていないため、素案の中でこれらの周知や情報発信の重要性も明確に位置付けるとよい。

●岡本委員（アカデミック・リソース・ガイド(株)代表取締役）

- ・外部書庫のあり方については、利用頻度による出し入れ用ではなく、デジタル化と連動した「保存・収蔵用の書庫」として定義・位置づけると良いと思う。
- ・デジタルの利便性を考慮し、例えば県議会の会議録や県の条例集など、物理的な本として配架されていてもほとんど閲覧されずウェブ検索の方が遥かに効率的な資料については、デジタル提供を基本とするなど、紙とデジタルの最適な役割分担を整理すべきである。
- ・前回の議論で林委員から「建物は機能性が最優先」との意見があったが、建築的な美しさと優れた図書館機能は相反するものではなく、「優れた機能美」こそが美しい建築を生む。
- ・素案の中で「機能性のみを追求する（＝安価な箱物を作る）」というメッセージを強く出しすぎると、民間事業者が参入しにくくなる（民間活力を導入する動機を削ぐ）ため、表現には慎重であるべきで、機能と美しさが両立するデザインを目指すべきである。
- ・管理運営体制については、他県の議論を見ても結論は出ており、47都道府県中46自治体が直営で運営していることから、現実味に乏しい図書館本体の「民間委託（民営化）」についてこれ以上議論して時間を浪費すべきではなく、早期に「直営」と決断して前に進むべきである。

- ・直営で行くのであれば、県職員がここで求められている高度な議論や業務に対応できるよう、職員に「修士号」を取得させるなど、専門性の高い人材を県自らが本気で育成・強化する方針をとるべきである。
- ・静岡県民は県政や図書館のあり方を「自分事（協働の主体）」として捉える素晴らしい市民性（当事者意識）を持っており、これは他県にはない大きな強みである。
- ・したがって、構想内における県民の位置づけを、単なる「サービスを受ける対象（客）」とするのではなく、ともにより良い図書館を創り上げていく「協働の主体（パートナー）」として定義し、県民の力を集めてこの場を盛り上げる主体として位置づけるべきである。

●川村委員（静岡図書館友の会代表）

- ・素案はこれまでの委員の意見がうまく網羅されており、現時点で大きな不足等は見当たらない。
- ・素案に直接書き込むかは別として、近年の研究で「図書館の充実度（司書の優秀さや蔵書環境）」が「住民のウェルビーイング（健康度等）」と相関関係にあるという論文もあり、これは将来的な医療費削減などの広義の「経済効果」とも言えるため、こうしたウェルビーイングの視点をより深く盛り込んでほしい。
- ・管理運営体制については、今後の検討とされているが、県立図書館としての責任を果たすためにも直営方式を基本とし、市町立図書館の職員（人材）育成・支援を担う機能をしっかりと明記すべきである。

●小久江委員（袋井市生涯学習課長・元市立袋井図書館長）

- ・素案については、これまでの意見を盛り込んであると思う。
- ・管理運営体制や外部書庫の整備方針など、今後の具体的な検討事項とされている部分については、専門的な司書を置いて直営でやっていただけるとありがたい。今後さらに慎重にシミュレーションと議論を重ねて深めていってほしい。

●林委員（静岡文化芸術大学教授）

- ・岡本委員の指摘する「機能美（優れた機能を持つシンプルな美しさ）」には完全に同意であり、無駄な装飾や派手さにお金をかけるのではなく、予算の使途（本やサービス）を厳選してほしいという意図である。
- ・交流やイベントは周辺のグランシップやアリーナを活用すれば良いため、新図書館自体は、本の保存と閲覧という本質的な機能に特化し、余分な付加機能をそぎ落としたシンプルな設計にすべきである。
- ・民間活力をあてにする（PPP等の導入）方針には慎重であるべきで、民間ビジネスも限界を迎えている中、利益の出ない無料の公共図書館を民間任せにすることは無理がある。
- ・外部に丸投げするのではなく、図書館が自らやるべき本質的業務に集中し、専門資格（司

書)を持った職員による直営方式でしっかりと運営していくことに徹するべきである。

- ・岡本委員の「外部書庫をデジタル化センターとする」方針には賛成であり、その場合は東静岡駅前から離れた安価な場所の整備で良いが、もしそのデジタル化の方向へ行かず「通常の蔵書の分散」とするのであれば、取り寄せの搬送時間コスト(利便性低下)を避けるため、極力、東静岡駅前に近い場所に書庫を整備すべきである。
- ・従来の「貸出冊数」や「入館者数」を重視した図書館サービスを評価する基準は、県立中央図書館の高度なレファレンスやデジタルサービス、市町支援の実態にそぐわないため、早い段階で「新たな評価基準(評価指標)」を意識して検討しておくべきである。

●伊委員(静岡大学情報学部助教)

- ・素案の全体的な枠組みはこれまでの意見を網羅しており評価できるが、ウェルビーイングなどの抽象的な用語について、静岡県として具体的にどう定義し、どういうビジョンで臨むのか、具体的な定義・解釈を明確にしておく必要がある。
- ・外部書庫の活用については、慎重に検討が必要である。基本的には一体型が良いと思うが、コスト削減の観点からシミュレーションが不可欠である。
- ・建物の外観について、林委員のコスト抑制の意見も理解できるが、若者をターゲットにするならば、ある程度のデザイン性(機能美)や魅力的な見た目がなければ若者が集まらないため、コストとデザインのバランスを追求してほしい。
- ・あれもこれもと欲張った結果、予算削減のためにすべての機能が中途半端になる「二兎を追うものは一兎をも得ず」の状況になることを最も懸念している。金銭的なイニシャル・ランニングコストだけでなく、目に見えない価値やデメリットも含めて厳密に計算した上で、県立図書館として何が最も重要で、どこにフォーカス(優先順位)を当てるのかの明確な道筋を立てていくべき。

●野末委員(青山学院大学教授)

- ・岡本委員から提案のあった「外部書庫にデジタル化(アーカイブ)に特化した役割を持たせる」という積極的なアイデアに賛同する。単純に出納して使えば良いという資料も割り切って書庫に保管するというのも合理的である。
- ・外部書庫に送る予定の資料(保存資料)の中にもいくつかの種類(区分)がある。例えば、デジタル化されて現物自体の利用頻度は低い「現物としての学術的・歴史的価値が高いもの」については、東静岡駅前で展示資料として活用するなど、資料の重要性や見せ方に工夫を凝らすべきである。このように丁寧な仕分け・区分けを行うことで、静岡ならではの独自の書庫・展示モデルが構築できる。
- ・外部書庫の資料を手に入れるまでに時間がかかるデメリットを補うため、技術を活用して「バーチャル書庫」を構築したり、詳細なオリジナルの書誌情報を提供したりして、書庫の本が死蔵にならないような検索・閲覧環境を整備すべきである。
- ・資料のデジタル利用や読書のあり方は多様化しており、文字を読むだけでなく「聴く読書(オーディオブック)」「みんなで読む読書」「読み聞かせ」「触る読書」なども含めた

多様な資料利用のあり方を強調しても良い。

- ・新県立図書館は「良い資料を揃えて待っている」という従来の受け身の姿勢から、能動的に働きかける図書館（課題解決型・ウェルビーイング向上型）、提供した情報を活用し、活動するところも視野に入れるような視点があるとよい。
- ・そのためのキーワードとして、県内の地域課題を自ら出向いて調査するリサーチ機能と、資料や情報、そして産官学・民間等の多様な主体を適切に結びつけるコーディネート機能の2つがある。
- ・周辺の東静岡地区だけでなく、県内全域の企業、学校、自治体などの活動を情報で支え、具体的な課題解決のコラボレーション事例を積み重ねていくような、能動的な静岡モデルを確立してほしい。

●朝比奈会長（総括）

- ・民間活用（PPP等）や直営のあり方については、極端に民間を排除するのではなく、さりとして丸投げでもないお互いの強みを生かしが、本当の連携・線引きをどうするかが今後の大きなポイントになる。
- ・単に館内で利用者を待つ受け身の姿勢ではなく、デジタル・AI時代や次世代を見据え、県内各地へ出向く「出張型サービス」や、周辺施設・全県と情報や人を適切に結びつける「コーディネート機能」など、能動的に動いていく姿勢が大切であると考えられる。
- ・従来の貸出冊数や入館者数といった単純な数字だけで図書館の価値を評価するのではなく、新図書館が提供する高度な情報サービスや地域への貢献度をどのように検証していくか、新しい評価指標についても意識して整理していくことが求められている。